

Special Interview

俳優・歌手
山崎育三郎さん

一歩を踏み出した人にしか 見られない景色がある

甘美な歌声と端正な顔立ちで観客を魅了し、「ミュージカル界のプリンス」とも呼ばれる山崎育三郎さん。俳優として舞台上で演じるにとどまらず、より多くの人にミュージカルの魅力を伝えることに使命感を持ち、どのようにミュージカル界を盛り上げるかにも心を砕いているそうです。その強い気持ちと行動力を支えているのが、高校時代の留学経験でつちかったマインドだといいます。山崎さんが留学中にいかに自分の限界を超え、何を学んだのか、お聞きしました。

PROFILE

山崎育三郎（やまざきいくさぶろう）さん

1986年1月18日生まれ。東京都出身。1998年、12歳でミュージカルに主演として初出演。2002年7月より1年間、アメリカ合衆国ミズーリ州のノースカントリー・ハイスクールに留学し、2003年全米高校生クラシック音楽コンクールミズーリ州大会にて上位入賞する。2007年に「レ・ミゼラブル」のマリウス役。その後多数のミュージカルに出演する傍ら、2015年テレビドラマ「下町ロケット」に出演以降、ドラマを初め音楽番組などテレビにも活躍の場を広げている。2018年7月25日オリジナルアルバム「I LAND」を発売。

自分を変えるために あえて選んだ険しい道

——山崎さんは、ミュージカル俳優を目指して勉強中の音楽大学付属高校2年生の時、1年間休学して留学なさいました。やはりミュージカルの勉強のための留学だったのでしょうか？

そういうわけではありません。僕は4人兄弟の3番目で、上の兄は高校、大学とアメリカへ、2番目の兄は大学の時にニュージーランドにラグビー留学していたんです。そんな兄たちからいろんな話を聞いていて、僕も海外に興味がありました。

実は、音大付属に入学したものの、中学3年生くらいの頃に迎えた変声期を終えて、子どもの高い声も出なければ、大人の低い声もまだ成熟していない中途半端な時期に入り、思うように歌えなくなってしまって。学校が音楽に特化した特殊な環境だったのでいろんな世界を見てみたいと思いましたし、僕はもともと人前が苦手でシャイな性格だったので、一步を踏み出して変わりたいという気持ちもあって留学を考えました。留学先が普通高校で音大の実技の授業などの単位が取れなかったので、1年休学という形で行くことになったんです。



——学校はどのように決めたのですか？

オハイオ州に留学した兄の影響が大きかったです。「都会に行くと日本人が多い。日本人同士で話してしまっって英語が身につかないから、田舎に行け」というアドバイスを受けて、「アメリカの日本人が少ない田舎」という希望を出しました。それで紹介されたのがミズーリ州。普通高校でしたが、音楽に力を入れていて合唱部が強い学校でした。ミズーリ州は、隣の家まで車で行くくらいの山の中で、自然豊かな……本当に田舎でしたね。(笑)日本人どころか中国人や韓国人もいないところで、僕に会って初めてアジア人を見たという人ばかりで。2000人くらいの生徒の中で、アジア人は僕だけという環境でした。

——希望通りの留学先での生活は、いかがでしたか。

これを聞いたら留学したくなくなってしまうかもしれませんが…。(苦笑)初日に登校してすぐ、右も左もわからずに校内を歩いていたら、「Hey, you!!」という感じで不良っぽい子たちが4、5人来て、いきなりバーンと突き倒されたんですよ。僕よりすごく体が大きいし、こちらは英語が話せないし、すごく怖くてその後のことはあまりよく覚えていません。先生が来て連れて行ってくれたのかな…？歩いているとジロジロ見られて、からかってくる子もいました。

英語ができなかったので授業の内容もわからず、クラスメイトが話しかけてくれても返せませんから友達もできなくて、どんどん内向的になっていきました。休み時間もトイレに隠れていてみんながいなくなってから出て行ったり、人を避けるようになって。

兄から「田舎に行くほど人種的な偏見は多いし、いじめられることもあるに違いない。でも、英語を身につけられるから頑張れ」と聞いてはいたんで



留学中の1コマ



す。でも、それが3か月くらい続くと、やっぱりしんどかったですね。僕より少し後に来たベトナム人の留学生が、「もう無理」という感じで泣いていて、1か月くらいでいつの間にか帰ってしまっていて。お互いに英語ができなかったので話ではできませんでしたが、その気持ちもわかるなど思いました。

逆境からの大ブレイク 一夜にして人気者に

——それはつらい状況ですね…。なぜ山崎さんは頑張れたのでしょうか。

僕のホストファミリーは中年のご夫婦で、何人も留学生を受け入れてきたベテランだったんです。学校でいろいろあることも予測できたのか、お母さんが最初から「つらいこともあるだろうけど、私はあなたの味方だから」と言って、唯一の味方でいてくれたことは大きな助けでした。でもそれ以上に、「お兄ちゃんたちに負けたくない!」という気持ちが大きかったと思います。兄2人は乗り越えたんだから、絶対に自分だけ途中で帰るわけにいかない、どうにかしなくちゃと思っていて。

そんな時、学校行事のダンスパーティーが開かれたんです。500人くらいの生徒がいたと思います。僕はミュー

「モーツァルト!」の舞台
写真提供/東宝演劇部

「I LAND」

2018年7月25日発売
オリジナルアルバム初回盤
(CD+DVD+GOODS) UPCH-7437
¥4,300 +税通常盤
(CD)UPCH-2167 ¥3,000 +税

ジカルでやってきたダンスも少し踊れるし、何かあるかもしれないと思って参加したんですが、やっぱりみんなの輪には入れなくて。アップテンポの曲が流れるとみんながリズムを取りながら円になって、その真ん中で人気者やダンスが得意な子が踊って盛り上がっているのを柱の陰から見ていたら、「自分があの真ん中で踊ったら、何かが変わるかも」という思いが浮かびました。もしかしたらボコボコに殴られるかもしれない、でもやらなかったら絶対に何も変わらないから、やるしかないと決めました。

「行ってやろう!」と思ってから数曲は勇気が出ずにやり過ごしたんですが、ついに生徒をかき分けて出て行ったんですよ。無意識のうちに「ウワァァァ!」って大声で叫んでました。3か月間の自分を変える己との闘いだったので、気合いを入れていたんでしょうね。僕がポンと真ん中に立った瞬間、「何、あいつ?」と会場が一瞬シーンとしました。でも、踊ったんです。流れていたヒップホップの曲には似合わない、ちょっと優雅なターンをしたりするジャズダンス

自分が動くことで
取り巻く世界が
変わっていきました

を。(笑) そうしたら一人の女の子が「IKU!」(現地での当時のニックネーム)と叫んだのをきっかけに、みんながそれに続いて【IKUコール】が始まりました。僕もテンションが上がってセンターで踊り続けたらワッと沸いて、最後には「お前最高だよ!」ってみんなが集まってきてくれて。その時からすべてが変わりましたね。

——シャイなご自身の限界を超えた瞬間ですね! 限界を超えた先には何が待っていましたか?

翌日から【IKUブーム】が起こりました。「昨日、見たよ!」とか「聞いたよ!」とみんなが話しかけてきて。いじめっ子たちまで僕のところに来て、ハンドシェイク(ハイタッチから、手を軽く握ったり拳をぶついたりする親しみを込めた挨拶)を求められましたから。僕は初めてでやり方を知らなかったの、ぎこちない感じでしたが…。(笑)何組かのグループが僕を取り合うように放課後遊ぼうと声をかけてくれたりもして。一気にスターになって、毎日が楽しくなりました。

取り巻く世界が変わって、それからは僕自身も積極的に行動するようになりました。運動部の試合の前の国家を歌わせてほしいと志願して歌ったり、歌のコンクールに出たり。アメリカでは黙っていると埋もれてしまうけれど、自分が表現することについてはみんな耳を傾けてくれるし、認めてくれるんです。

授業中も、外見が派手でガムを噛みながら机に足を乗せているような、日本で言えば授業態度が悪い子も、授業に参加しているんですよ。先生の話はちゃんと聞いて、「先生、俺はこう思う」と、自分の意見を言うんです。それはエンターテインメントにもつながるところがあります。アメリカのミュージカルのお客さんたちは、面白ければ拍手や歓声を上げ、つまらなかつたらブーイングして帰ってしまうんです。日本ではみんな行儀よく、みんな同じタイミングで拍手をして静かに観ますよね。どちらが良いということではなくて、そういう文化の違いのおもしろさにも気づきました。

怖さを乗り越えたら 新しい世界が拓ける

——ダンスパーティーでの山崎さんの行動は、なかなかできることではないと思うのですが、どうしてできたのだと思いますか?

12歳でミュージカルデビューしたとき、人前が苦手でいつもお母さんの後ろに隠れていたシャイな僕が、沢山のお客さんの前でお芝居したり歌ったりしました。叱られ、泣きながら稽古を重ねて、恐怖感を乗り越えて舞台に立ち、やり遂げて拍手をいただいて、「一生この道で生きよう」と決めたほど感動したんです。この経験から、一步を踏み出した人にはしか見られない景色があることを知りました。ダンスパーティーは、たぶん最後のチャンスでした。あの時に状況を変えられなかったら、留学は途中でやめてしまったでしょう。踊ったとしてもどうなったかわからないし、とても怖いことでしたが、12歳のときに「怖いところにしか成長はない」ということを学んでいたのだから動けたのだと思います。

——パーティー以降、友達がたくさんできたというお話ですが、その頃には英語でコミュニケーションできましたか？ 英語をどのように身につけたのでしょうか。

1年間日本語に触れないと決めていたので、徹底して日本語をシャットアウトしました。どんなに学校がつかなくても日本の家族に電話はしませんでしたし、留学中だった兄たちとのやりとりも英語のメールだけでした。そんな英語漬けの生活を続けて、ちょうど3か月くらいで、急にみんなが言っていることがわかる瞬間がきたんです。僕は音楽をやっているからか、英語がメロディーのように聞こえていました。ある友達が、僕らのところに来るといつも同じ言葉で話しかけてきたんですが、僕にはそれが『ララララーラー』と音の上がり下がりの抑揚とリズム、そこに『ワダヤドゥーイーナー』というように発音が乗って入ってきて。単語はキャッチできなかったのですが、繰り返し聞いていてちょっとまねして言ってみたり、場面を思い返して文脈を考えたりするうちに、「何してるの？ (What are you doing now?)」って言っていたのか！とフツとわかったんです。

英語の勉強ができる人は、言われたことを日本語訳して日本語で返事を考え、それをまた英訳して話すので、頭で考えてしまってなかなか本当に身につかないと聞きます。でも僕は英語が全然できず、日本語に訳さずに場の状況と音から感覚的に体で覚えていったので、一度コツをつかんでからは上達が速かったです。

——英語習得のほか、留学で得たことで今生かされていることを教えてください。

3年前、テレビドラマに挑戦したのは、テレビで自分の知名度を上げることで日本のミュージカル界をさらにも盛り上げられたらと考えてのことでし

た。とはいえ、テレビの世界に入るために10年近くキャリアを積み上げてきたミュージカルの舞台をしばらく休んで、スケジュールを真っ白にした時はとても怖かったです。でも、その結果、幸運なことに最初にお話をいただいたドラマ「下町ロケット」が大ヒットして僕もみなさんに知っていただけるようになり、その後のテレビのお仕事につながっていきました。

今年、音楽番組でミュージカルナンバーを歌わせていただいたことや、僕が出演した作品のチケットがソールドアウトしたことなどは、3年前には考えられなかったことです。今もまだ舞台に立っていますが、テレビで僕を見て初めてミュージカルを観に来たと言ってくくださる方もたくさんいらっしゃいます。「多くの人にミュージカルに親しんでほしい」という3年前の想いが少しずつ叶ってきました。それは、あのとき決意しなければ起こらなかったことかもしれません。ダンスパーティーで踊ったときの「自分が行動しなければ何も変わらない」という感覚がずっと残っているんです。

日本で上演されるミュージカルは海外で生まれた作品が多く、世界に発信できる日本の作品は今のところありません。いつか日本が世界に誇れるオリジナルミュージカル作品を作り上げたいというのが僕の大きな夢で、いろんな人に聞いてもらっています。自分の考えを表現し、伝えて、難しいことに挑戦したいという考え方も、留学を通して学んだことです。

Message

留学ができるチャンスがあるのなら、僕は絶対にしてほしいと思います。世界を見た方がいいし、新しい自分に出会えます。僕はポジティブな性格だと言われますが、「マイナスに考えても何も生まれない」と考えるようになったのは留学中です。つらいことがあるたびにポジティブになっていくような感覚があって、帰国後、周りの人からも「変わった」と言われました。僕の場合は大きな一歩を踏み出すきっかけになり、自分を大きく変えることができました。一歩を踏み出した時に見える素晴らしい景色が必ずあります。それはきっと宝物になるので、ぜひ留学をして何かを得て帰ってきてください。

